

# 66年前の被曝語り継ぐ

## ビキニ事件「隠して生きた人も」



1954年3月1日にマグロ漁船「第五福竜丸」が太平洋のビキニ環礁で米国の水爆実験に遭遇し、乗組員23人が被曝した「ビキニ事件」。福竜丸が持ち帰ったマグロから基準値を超える放射線が検出され、汚染された魚が食卓に上ることを不安に思う主婦たちの思いが、反核運動につながった。だが、福竜丸以外の船の被害実態については、調査すらされないまま。こうした事実を語り継ぐと24日、第五福竜丸平和協会が都内で集会を開いた。

### 都内で集会

水爆実験が行われたのは太平洋に浮かぶマーシャル諸島のビキニ環礁。米ソ冷戦の時代、米国は太平洋と本国で、旧ソ連は中央アジアと北極圏で核実験を繰り返していた。福竜丸のほかにも、のべ992隻が54年末までに汚染魚を廃棄したが、日米両政府は55年に7億2千万円の補償金で政治決着し、福竜丸以外では、健康調査はされなかった。廃棄した船のうち、最も

多いのが高知の船だった。その数270隻。魚が売れなくなることも差別を恐れ、当事者が口をつぐんだため、被害は忘れ去られたが、80年代に高知県の高校生たちが調査を始め、再び知られるように。2016年には元船員や遺族が被曝の影響でがんなどを患ったとして、「労災申請」にあたる船員保険の適用を申請し、国家賠償請求訴訟も起こしたが、いずれも退けられた。

この日、講演した市民団体「太平洋核被災支援センター」の副代表、岡村啓佐さん(68)は元船員らを訪ね歩き、写真集を18年に出版した。「核被害はなかったことにされ、体を調べてはしなかったと憤る人もいれば、被曝者であることを隠しながら生きてきた人もいた。そういう人たちの声を届けたかった」と話す。「世界中の人に知ってほしい」と、写真集は全ての説明に英語の訳をつけた。

高知市から参加した増本美保さん(70)の夫、和馬さんは国家賠償請求訴訟で原告の1人になったが、昨年12月に胆管がんで息を引き取った。亡くなる直前まで被曝の影響を気にしていたという。「核はなくなっただけでほしい」と話した。

福竜丸展示館(江東区)では3月10日まで、岡村さんの写真展が開かれている。(西村奈緒美)



講演する岡村啓佐さん(24日、江東区) 築地中央卸売市場ではビキニの核実験で放射能に汚染された魚を土中に埋める作業が行われた(1954年)